SKI-O 世界マスターズ選手権　2002

2 年連続のメダルを逃がした武石、大幅に順位を上げた高原、厳しいコースを完走した渡辺。40 年ぶりの暖冬で雪がないヤブロネック、一般スキーヤーの目の前でレースが行われたハラホフ（チェコ）での模様です。

参加選手

エントリーは 4 人でしたが、直前に M４０の佐藤康成（40、福島県）が原因不明の胃炎で緊急入院した為、リーダーの武石雄市（65、山形県）2 年連続の高原進（60、神奈川県）クロカンスキーは初めての渡邉勇造（50、東京都）と 3 人、そしてチェコから留学しているパベル君に同行してもらった。

4 人はいずれも酒好き？で到着後プラハに 2 泊して観光とビールで、ヤブロネックに入村するまでスキーの話を全然しないまま現地入りした。

モデルイベント

ホテルは、大勢参加者がいるスウェーデンチーム、オーストラリア、イギリス、アメリカの選手と一緒で、ヤブロネック市街地が足元に、その向こうに結氷したダムを抱えたテレインが一望できる小高い丘の頂上に農家を改造したタワーホテルでした。

幸いな事に、大会会場に運行している 2 系統のバスのうち、１系統は始発がこのホテルなのでどんなに助かった事か。

さて、ホテル入りしたと同時に私は高原、渡邉両人に「今からはスキーオリエンテーリングの競技に集中したいので、観光気分を一掃してマスターズ大会に個人の責任で行動しましょう」と申し渡した。

チェコ入りしてから感じていた事だが、都市部に雪がない。郊外も大会を心配させるように暖かく少雪である。パベル君の通訳でわかった事だがなんと４０年ぶりの暖冬で一頃降った雪がどんどん消えているのだそうだ。

指定されたバスでモデルイベントのテレインに行ったが、森の中の小道に係が雪を盛ってトラックを作っている。何時から降雪がなかったのか全てのトラックがアイスバーン状態だ。

ワックスの選択に苦労しなくて済むがスキーの痛むのが気にかかる。

予想はしていたが、アメリカのクロフォード　シャロンがやはり参加していて再会を喜び健闘を誓った。彼女は夏も冬もオリエンテーリングで世界を飛び回っており、日本人もかなりの知り合いがいるはずです。「マイフレンドは石井龍男、井上直子、小山太郎」と SKI-O で一緒になった者の外に、フットの方を思い出しては口にしていました。

パベル、シャロンを加えた日本チーム

オープニングセレモニー

開会式は、夕方 6:30 から街のイベントセンターもある立派な市役所の下の広場である。

国際大会の恒例？によって会場にはチーム毎に参加国を紹介されながら入場行進するが、集合所が何時も以上に賑やかだ。それもそのはずで、今回はヨーロッパユース選手権も併設されているので、ティーンエージャーが多いのだ。

ひときわ大きいグループのところを除いたら、驚いた事に若い男性と女性が私に駆け寄ってきて何か話し掛けて来る。ロシア語だ。意味がわからなくてきょとんとしていると、私のチームウエアーの背中を指すのだ。

思い出した、背中のサインなのだ。そう言えば見覚えのある顔だ。彼等は昨年の JWOC 女子と男子のチャンピオンなのだ。何回かクリーニングしてかなり薄くなったが、彼等の記念サインは厳然と残っている。

私たち 3 人は、再会を喜んで写真を撮った事は言うまでもない。

マーチングバンドは地元のブラスバンドで、かなり年配の楽団員がステ

ージ上で頑張ってくれていた。

開会式の挨拶は、チェコ共和国オリンピック委員長、オリエンテーリング連盟会長、ヤブロネック市長、IOC の SKI-O 委員長が型どおりの挨拶をした。

ロングディスタンス　Ⅰ

M65 クラスは、スタート時刻が最後のようだ。私のスタートは 13:34。

気温はなんとプラスの 4 度。雪温も０度付近だがワックスは昨夜 FH８を仕上げて、おまじないにセーラーをかけた。

板は、ワックステストの結果「オガサカ」に決めた。ビンディングはパイロット。ざら目状の雪はかなりのスピード感がある。

昨年、優勝したロシアのロッサノブパベルは今年も M60 なのでライバルはドイツと地元チェコの選手だろう。

①には分岐を確認しながらスケーティングでピステ(圧雪車)道を登る。モービル道を詰めて程なくパンチ。②にはショートカットしてしまったがこれは疑問だ。③－④に走行不能ルートが目に入り、給水所前に下ってから上るルートをとったが、③の北にあるオープンにシュプールがあったようなのでそれを登ったほうがベターか。でも、現地では針葉樹の落ち葉で森の中は登りでクラシカルのように直登してもバックしないので登りの技術に差がなくなっていた。得意の下りでタイムを稼ぎたかった。

④と⑤はオープンにセットされているので遠くから直線的にショートカット。特に⑤は下り斜面でユニットが固定さている三脚が倒される程激しい当りがあったようだ。このコースではここが折り返し点で⑥をパンチすると⑦まで直線で２．３Km の超ロングレッグ、このレッグのトラック選択が勝負だった。私もここで北東から南東に走るルートを考えることなく最短トラックを選択し、沢を 4 本もアップダウンして体力を消耗し⑦のアタックをミスにつなげてしまい約 6 分のオーバーとなってしまった。

ロングディスタンス　Ⅱ

舞台をポーランド国境のハラホフスキー場に移し、チェコ国内で唯 1 箇所のシャンチェを望む、施設の整ったスキーイベント広場をスタート・ゴールとして、西の森のクロカンコースにモービルネットを張っていた。

スタート時刻は 11:32、アップ中にレーシングスーツのファスナーが壊れるアクシデントがあったが、メンタル的にとても落ち着いてスタートできた。今日のコースは超ロングレッグが見えない、敢えて言えば△－①までだろうか。ほとんどがピステ道に見える。①－②も南北に流れる沢筋東に距離の短いモービル道があるが６０ｍの登りだ、迷わず大きく迂回するピステ道を選んだ。スキーが滑っているから登りでも快適なスケーティングが出来た。

④－⑤の森の中の下りショートカットでトラックを 4 本横断し、一瞬ポジションロストになりかけたが西の分岐でリロケーションできた。⑦のこぶに数個のコントロールがあり惑わされそうになたがクリヤーし、⑩－⑪もクロカンスキーヤー専用のオーバーパス（橋）を渡って一般スキーヤーと交錯することなく見せるレッグになって、選手に最後の頑張りを要求する心憎いレッグだった。

今回は、ＳＩユニットを使用していて、ゴール直後に次々とラップ表を渡してくれた。

今日は、自分のオリエンテーリングが出来たので、速報所でディスタンストータル 15 秒でメダルに届かなかったことを見た時は、NOＩのミスに悔しく一瞬沈んだ気持ちになったが、トレーニングさえ出来なかったことを思えば、精一杯頑張った自分を慰める気持ちに切り替えた。

昨年イタリアで起した大腿筋断裂のアクシデントから立ち直ったのだから、元気でさえいたらマスターズだったら又挑戦できる出はないか、と。

来年は、2 年前に 1 度足を入れたことのあるエストニアで 2 月下旬に予定されている。

スキーO は、ヨーロッパ大陸を北に行くほど強敵の多いスカンジナビアに近づくので、計画的なスキートレーニングしないとなりません。

私の置かれている国内の SKI-O 立場上それが余程強い意志がないと適わない事はわかるが、私は、その目標を見据えたい。

Ｍ５０リレー

SKI-O マスターズは、リレーを Ｍ３５と Ｍ５０に分けられた。ブリテンⅡではＭ５５になっていたので、日本チームは５５歳以上の選手が武石、高原の２名なのでＭ３５のクラスは厳しいものがあると思っていた。

現地でブリテンⅢを見て５０に下げてくれたので渡邉をメンバーに正規のクラスに望めることが判明した。

テレインは、再びヤブロネックスキースタジアムを発着する雪のないコースを滑る事になる。

ヤブロネックスキースタジアム

オーダーは、迷わず高年齢順とした。
Ｍ５０クラス出場チームは１２チーム。
１走の武石は、スタート１５秒前に渡された地図をマップホルダーにホールドにもたついている間に号砲が鳴ってしまった。
フリー制限なのにスケーティングしているものがいる。優勝したらクレームものだが、そんな滑りも見られないのでそいつをかわして前には出たが、１走は各チーム５０代なのだろうどんどん離されて行くのがわかる。
連日の気温上昇で日当たりのよいトラックは雪がない、１mほどの巾で雪を敷いているが周りを見ても雪がないので係りの苦労が偲ばれる。
軍隊の出動は考えなかったのだろうか。
私は、ミスもなく２走の高原にタッチしたが、私の後にロシアのロッサノブ　パベルが入ってきてミスしたと言う。俺はビリでなかったんだと妙に感心した。彼と、来年もエストニアで会おうとゴール付近で一緒に写真を撮る。

春のような陽気の中、高原も渡邉も自分のスキーオリエンテーリングで２時間かからずにゴールできた。
少雪の代償は大きく、滑走面がみなぼろぼろになっていた。
３人のＳＫＩ－Ｏマスターズは、一人も途中リタイアがなく全て終わった。
理由は、天気が良かった事もあるが国際大会の経験が多分にそれを物語っているように思う。

Ｍ５０リレー日本チーム

表彰式

表彰式は、バロック様式の劇場に、開会式以上に着飾った一般市民も入場させてメダリストをやんやの喝采で祝福した。
特に、最高齢のメダリストには全員のスタンディングオベレーションで敬意を表し、受賞者の心からうれしい笑顔がとても印象に残った。
若者達は、その後のバンケット・デスコ会場へと移動し、翌日の夜明け早々には帰路についた。

関係クラスの成績

●Ｍ５０　TOTAL

１	Prinda Oldrich	CZE	103:18
2	Tolkkinen Veikko	FIN	110:41
3	Trobe Lutz	GER	111:11
15	Watanabe Yuzou	JAP	225:57

●M60

1	Salmi Tarmo	FIN	87:07
2	Kanerva Unto	FIN	87:09
3	Conrad Helmut	GER	92:19
10	Takahara Susumu	JAP	123:15

●M65

1	Horn Gerhard	GER	93:12
2	Heinemann Rolf	GER	102:43
3	Havlik Jaroslav	CZE	109:30
4	Takeishi Yuichi	JAP	109:45

●リレーM50

1	FIN	FIN C	73:32
2	CZE	CZE C	76:02
3	FIN	FIN A	79:30
12	JAP	JAP	118:20

WMOC チェコ大会に参加して

昨年のイタリア大会に続けて今年はチェコ大会に参加しました。昨年のイタリアでは、ポールを折ってしまったりホテルにスキー靴を忘れたりと失敗をしましたので、今回は忘れ物がない様に、朝ホテルから出発前に何回も確認してバスに乗りました。
大会中は40年ぶりの暖冬とのことで気温が旅行ガイドブックでは 1 月の平均が－５℃と書いてあったが、＋３～１０℃くらいで日本の春先のようだと感じました。
大会会場は、ホテルのあるヤブロネック街の北側山の中で 1 月 30 日のロング１と最終日のリレーを、2 月 1 日のロング 2 はバスで 1 時間くらい離れたポーランド国境に近いハラホフの山中で行われました。
圧雪されたピステ道モービル道は、日陰は雪もよい状態であったが、ひなたはザラメ状の雪で、林のショートカットは小枝等の為、雪面をスキーで滑るのではなく歩くようにして進みま

した。

レースの結果は、Ｍ６０クラスの15人中10位で、自分なりにベストを尽くしたがその実力がどのくらいか知る事ができたと共にすきーＯＬを多いに楽しみました。

Ｍ６５クラスの武石さんは 3 位と僅か15秒の差で惜しくもメダルに届きませんでしたが、私よりは約 5 分か
ら8分速いタイムでゴールでした。

ロングⅡ　M60&M65の地図

食べ物は美味しいチェコ料理そしてジョッキ１杯0.5Ｌが日本円で100円くらいのビールの毎日であり、食べる方では、スキーＯＬ以上にエンジョイして楽しみました。

プラハ観光では、プラハ城ほか街全体が世界遺産に指定されている街並みおよび教会等名所旧跡をパベル様の案内で歩き回り、主たる場所は見学できたよい思い出となりました。

このようなよい思い出が出来たのも同行していろいろお世話になりました武石様、渡邉様、パベル様にありがとうの気持ちをお礼すると共に、応援等頂きました多くの方々に心からお礼を申し上げ感謝いたします。

（高原　進）

初めての選手権でなんとかペナせずに帰れました。

美味しいビールもたくさん飲みました。

プラハでは、石畳もよく歩きました。

歴史のある街でした。（渡邉勇造）